
最近の米国の幼稚園

その一



津 守 真

最近十数年間に、米国の幼児教育は大きな変化をしていることを、書物などで知っていたが、幼稚園の実際がどのように変化したのか、私はかねがね興味をもっていた。今世紀の初頭から、スタンレー・ホール、ジョン・デューイらにささえられて、米国の幼稚園は遊びと生活を中心とする進歩主義教育に切りかわった。そして児童研究が盛んになるのに伴って、一九三〇年代には進歩主義教育の全盛期を迎えた。米国は広大な土地であるにもかかわらず、不思議なことに、一たび流行しはじめると、何ごとでも短期間に全国的にひろがる傾向がある。それは米国人の社交性——新しいことがあるとそれは人々の集りの中ですぐに話題になり、討論され、納得がゆくと容易に受け入れられる——と、ふだんは他の地域から隔離された生活をしていることによる心理的補償作用などによるのではないかと、私は思っている。

進歩主義教育は、一九三〇年代のはじめには、全米国に定着したといっているのではないかと思う。戦後、一九五一年から一九五三年にかけて、私は米国の幼稚園を、ミッドウエストの一つの市を中心としてであるが、かなり数多く見たが、どこに行ってもほとんど同じような教育形態で

あった。子どもたちは自分の好む活動を選択し、一へやにいくつもの活動のグループがあり、一クラスは二十人程度の小人数であった。先生には経験による熟達の度の相異はあっても、ことばの使い方や身体の動かし方など、かなり共通の訓練がなされていた。一九六〇年代の初めころより、知的教育を重視する傾向がしだいに強まり、従来の進歩主義教育は、社会情緒的側面を重視して知的側面を無視してきたとの批判がなされるようになった。それには、一方には米ソ間の宇宙科学の競争という社会的促進剤があり、他方には、児童心理学研究の方向が実験的になり、また、人間をある側面から切斷して見る傾向が強くなったことなどが地盤となっているといえよう。そして、最近では、いろいろの知的教育の新方法が提唱され、それが日本の幼児教育界にも影響を与えている。ベライダー、エンゲルマンの方式、ピアジェの方式、学習理論による行動変容方式などいろいろいわれているが、それは実際には、どのように行なわれているのかということは、私が疑問に思っていたことであった。

今回、きわめて短期間で不十分であったが、最近の幼稚園の実態を自分の眼で見て、考える機会が与えられたのは、

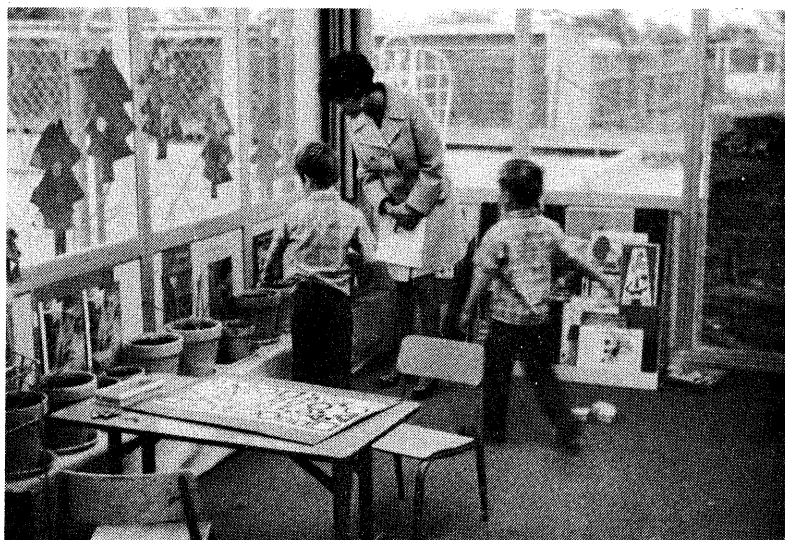
大へんありがたいことであった。以下に私が見聞したことにもとづき、私の考えたことを述べてみたい。

従来の進歩主義方式による幼稚園——サン・ラム チャイルドケアセンター——

サンフランシスコの郊外の新開地にある小学校に付設した幼稚園である。米国で幼稚園というと、五歳児クラスのみをいい、二、三、四歳のクラスはナースリースクールといつて、別の施設になっているのが普通であるが、このサン・ラム学校では、三歳のクラスから、公立小学校に付設されているのが珍しい。周囲はひろびろしているが、経済的には低収入の地域であり、いわゆる教育に恵まれない家庭の地域とのことである。

この幼稚園は、従来の方式による開放的幼稚園といわれていて、どのクラスも、一へやの中に四つか五つのコーナーがあり、それぞれ異なった活動が行なわれている。子ども的人数は、三歳児で十五人、五歳児で二十人ぐらいであり、各クラスに正規の先生が二人に、ボランティアが二—三人いる。

まず、三歳のクラスにいくが、へやにはいった瞬間に、



私は「閉じた空間」という米国の幼稚園の印象を思い起した。戸外はひろびろしているのだが、子どもの活動は主として室内に限られ、思うように戸外に出入するようなつくりになっていない。庭といっても、金網をめぐらしてあるだけである。この点は、米国の多くの幼稚園に共通である。日本の幼稚園は、庭のほとんどないところもあるが、庭のあるところでは、樹木を植えたり、花壇を作ったり、自然が豊かである。このような庭をもった幼稚園は米国にはきわめてまれである。

三歳のクラスには、絵の具で絵をかくコーナー、絵本のコーナー、砂箱（砂ではなくて、合成化合物のこまかい粒であった）のコーナーなどがあった。壁に、先生のための標語がはってあった。「子どもを教えることの目標は、先生がいなくても、仲よくあそべるようにすることである」。

四歳のクラスでは、一つのコーナーに、ラングイッジ・ラボのような設備が設けてあり、五、六人の子どもたちが絵本をみながら、イヤホンで英語のおはなしがきけるようになっている。そこにも先生が一人ついている。米国はいまでも多くの異民族、外国人をもつ国であり、家庭で英語をしゃべらない人々が多い。その子どもたちにとつ

では、小さいときから英語を学ぶということは、子どもが集団にはいつてゆくのにあたって、大きな課題なのである。その他、絵の具のコーナー、ままごと、つみきの汽車、パズルなどのコーナーがあり、どのコーナーにもおとながいる。そのおとなの中には、母親のボランティアがあり、自分の一歳の子どもをつれて、そこに参加している。

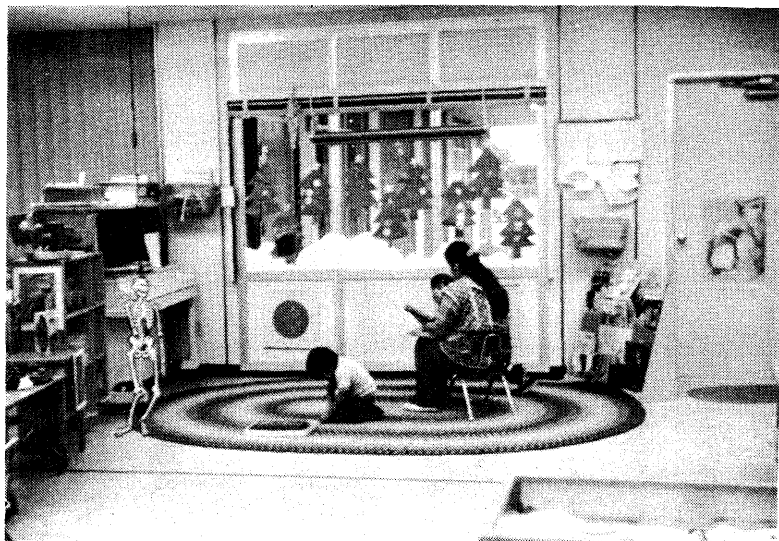
五歳のクラスも似たような状況で、やはり五つくらいコーナーにわかれて、四、五人ずつ子どもがあそんでいる。ここでも、インディアンの子が自分の子どもをつれてきてその子と遊んでいる姿がみられた。その母親はボランティアではなく、親子とも英語が話せないし、子どもも幼稚園になれないので、一週に何度か一緒にきているとのことであつた。

母親が幼稚園にきて自分の子どもと一緒にあそぶ姿は、日本ではほとんどみられないであろう。離れない子どもものそばにつきそつて見守っていることはあつても、他の子どもとも遊んだり、指導者になつたりすることはまれであろう。米国では何の不思議もなくこれができるのは、米国の学校教育が上から官の力によつてつくられたのではなく、地域の要求にこたえて、民衆の中から生れてきた伝統によ

る気軽さによるものといつてよいであろう。

おしなべて、どのクラスにも共通のことは、おとなの人数が多いことである。五人に一人くらいの割合で、専任の先生か、母親のボランティアがついている。だから、どのコーナーで遊ぶかは子どもの選択に任されているが、どのコーナーにいつても、おとながいる。そこで先生が子どもにいろいろと話しかけたり、指導をする機会があるが、その反面、子どもはおとなの顔をみながら活動する傾向がみられた。室内の鉢植のコーナーで水をやっている子どもが、こぼれた水をいたずらしはじめると、「ジョニー」と名前を呼ばれて注意される。絵の具の筆を洗いに洗面流しにいつた子どもが、筆を洗いながらあそびはじめると、また名前を呼ばれて注意されるという光景も見られた。このオーブンシステムといわれる従来の幼稚園で、案外、子どもがいきいきとあそぶ姿がみられないのは、おとなの数が多すぎるといふことと関係があるだろう。

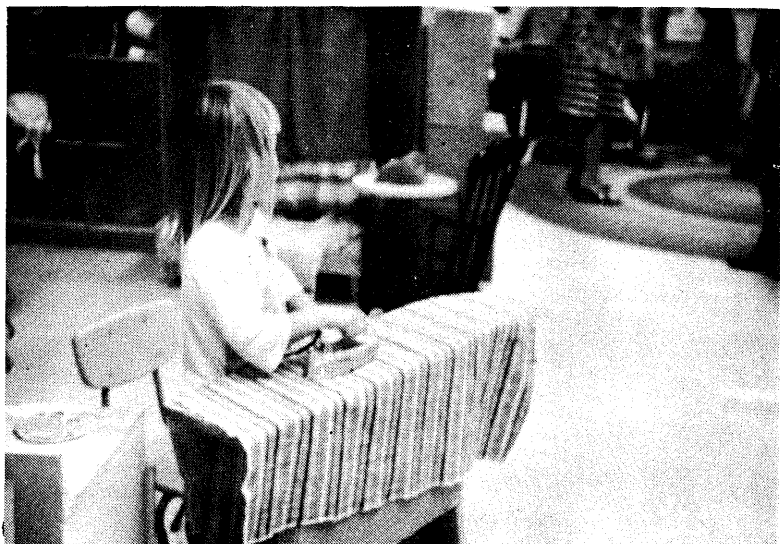
子どもたちが遊びに夢中になつてゐる姿がみられないといふことのもう一つの理由として、私は、先生が活動ととり組む意欲も問題になろうかと思う。二十年前に、私が見た多くの幼稚園では、店や、おうちごつこなど、活動の発



展が強調されていた。進歩主義教育では、子どもたちの活動の発展が強調され、そのことに研究や工夫が重ねられた。コア・カリキュラムの考えが幼稚園でも盛んであり、いくつものにわかれた活動が一つのテーマのもとに動いてゆくようなカリキュラムが、具体的に教師の手によって研究された。その後の教育界の動きとして、子ども自身の能力が強調され、お店ごっこや電車ごっこ、郵便やごっこなどをやるのも、子どもの能力を発達させることが目標であると考えられるようになった。とくに、知的能力の発達が強調されて、知的能力に直接関係のうすい活動は軽視される風潮が生まれた。教師が活動ととり組む意欲が減退するのも、当然の成り行きともいえよう。

たしかに、活動の発展があればこれよいとする考え方には問題がある。このような場合には、教師の側のカリキュラムが強調されるほど、活動が子どもを縛ってしまう。教師が役をふりあて、郵便屋さん、切手づくり、手紙を書く人など、いろいろの活動が展開して、三日か五日、活動がきちんと進行しても、子ども自身には感動もなく、変化もないということも起こりうる。戦後日本の多くの幼稚園で、教師が活動の発展を望みながら、他方、カリキュラム





管理が強く意識される場合に、このようなことが起こったのだと思う。その結果、子どもも不満であり、幼稚園はつまらぬ遊びをしているという批判が起こったのだと思う。

子ども自身の側に、何ものかを獲得する体験がなければ、活動の発展は表面的になってしまう。これは、能力の発達とかならずしも同じではない。この根底にあって、何かを成しとげ、何かに感じ、また新しいことを見いだすなど、自分自身が変化する体験が重要なのである。それが発達ということである。このことを可能にする保育の工夫が、保育者の課題である。

ところで、具体的には、このような幼児の体験は、活動の発展と表裏をなしている場合が多い。だから、活動の発展を工夫していると、子どもの側にも意欲がわき、満足があり、新たなものを獲得する体験が生じることが多くある。この点で、進歩主義の教育は、理論的に不十分なことがあったにせよ、保育の実際面では正しかったのだといえる。ここに紹介した現代の米国の開放式幼稚園では、活動の発展への工夫と意欲を欠いたときに、子どものいきいきとした生活が失われる原因が生じたのではないだろうか。



日本の幼稚園の場合、進歩主義教育は米国とは違った形でその後の発展をしている。倉橋惣三が強調したような教師論の展開——それは日本の精神風土を基礎としたものである——、あそびの具体的工夫、あそびを展開させる技法論など、まだ体系としては不十分であるにせよ、その実践面での成果は、世界にも類のないものがあると思う。

特殊クラス

この同じ学校の中に、文字を読むことのおそい子どもたちのための特殊教室が設置されているのは興味深いことであつた。それは小学校年齢の子どもを対象とするものであつたが、時間をきめて、字をよむことに特に小グループの指導を必要とする子どもたちが、いろいろのクラスから集められてくるものである。私どもが訪ねたときには、小学校二年生の子どもたち六人が、かなり広い教室のあちこちでそれぞれの活動に従事していた。その教室も、いくつものコーナーにわかれていた。顕微鏡のコーナー、布の繊維や植物の種など、いくつもプレラートにしてあり、自由に見ることができるようになっている。文字カードのコーナー、ティーチングマシンのコーナーなど、いずれも、

二、三人ずつ使用することができるような設備が用意されている。新しい科学機械のみでなく、へやの中央には廃物がいっぱいはいった箱があり、子どもはそれを組み合わせで好きなものを作れるようになっていく。

その六人の子どもは、毎週きまった曜日の二時間目にそこにくるようになっていると、一人の子どもが答えてくれた。米国の小学校は、午前中が二つの時間帯に分かれていて、その間に三十分くらいの休み時間があるから、二時間目といっても、正味一時間半以上ある。その子どもたちは、このへやにくると、自分の好きなコーナーにいつて活動することが出来る。正規の先生が一人と、助手の先生が一人いて、子どもが選んでとりついた場所にゆき、そこで指導をする。この助手の先生は、自分の子どもを育て上げた母親で、何年か先には正規の先生の資格をとるのだといっていた。ここで助手をすることが実習単位になり、数年して自分にもっと時間的余裕ができたなら、大学で聴講して必要単位をとるつもりだとのことであった。自分は子どもが好きだし、事務系の仕事よりも恵まれた仕事だと思うと、この母親は楽しみに語った。

普通の小学校の中に特殊クラスがあって、特殊指導を必

要とする子どもが、ある時間集められてくるという制度は、米国の小学校ではすでに普及し、確立している。二十年前に、私は米国の小学校のあちこちをみたとき、言語治療のためのクラスが設けられて、一定時間、いくつもの学校から子どもが集まって必要な指導をうけているのを見て、これはよいものだと思った。今回も、幼稚園を参観にきて、はからずもこのような特殊クラスを見て、心強く思った。最近では、知恵おくれの子どものために隔離された特殊学級をつくるのではなく、このような特殊クラスが増しつづけるということであった。

日本では、この二十年間に、特殊学級はかなり確立した。しかし、普通学級で他の子どもたちと共通の生活をしながら、ある時間、特殊な指導を受けるクラスはほとんどみられない。そのような子どもは、普通学級では劣等児にされてしまい、特殊学級にゆけば、普通学級の多勢の友だちとの交わりが絶たれてしまう。

日本の幼稚園や学校では、子どもの必要にあわせてしくみや制度をかってゆくという柔軟な考え方が少ないのだろうか。